

スリランカの空港ハブ構想が（日本の支援で）更なる前進!!!

マヒンダ大統領が掲げるスリランカを交通のハブ（要）とする構想が（日本の支援で）更に進むことになった。阿部首相のスリランカ訪問に合わせて、マヒンダ大統領と阿部首相はバンダラナイケ（コロンボ）国際空港のフェイズⅡのステージ 2 開発に着手することを明らかにした。

コロンボ空港の拡張計画はスリランカを空運のハブ化（南アジア地域の拠点化）するスリランカ政府の構想と一致するものであり、空港の拡張と併せて世界でもトップクラスの設備を持つ最先端の国際空港としようとするものである。新コロンボ空港計画は将来のスリランカの変貌と革新性を端的に示している。

フェイズⅡステージ2の着工に併せて、他のインフラ開発（空港高速道路の市内乗り入れや外環高速道路の完成、高級ホテル、娯楽設備の新設等）の整備も進み、コロンボの未来都市への変貌は更に前進し、アジアのハブ空港としての役割を強めるだろう。



コロンボ空港は最初の国際空港であり、2013年3月にハンバントタにあるマタラ ラジャパクサ空港（ハンバントタ空港）が開港するまでは唯一の国際空港であった。空港は Airport & Aviation Service 公団（AASL）によって現在、運営されており、長年にわたり海外諸国との窓口として経済的にも社会的にも政治的にも重要な役割を担ってきた。今後もハンバントタ空港と併せてスリランカのゲートウェイとして活躍することになるだろう。また、コロンボ空港はスリランカの旅行/観光業、および物流の中核/拠点としての役割も担っている。

実際にコロンボ空港の空の玄関口としての役割は過去5年間で驚異的な伸びを見せており、2013年に空港を利用した渡航者数は730万人と2009年と比べ80%も増加したのに対して、現在の空港の理想的な許容量は600万人と既にパンク状態にある。

コロンボ空港は日本のJICAから技術的、および経済的な支援を1980年代の開港以来受けてきている。フェイズⅡステージ1は1999年から開始し、2007年に完了しており、No1ゲート、Apron-Cのカーゴビルの新設、ATCおよびRADARの導入などが含まれる。

AASLはフェイズⅡステージ2をA（前期）とB（後期）の2期間に分け、2021年には150万人/年間の利用に耐えうる空港の拡張を計画している。最初のA期間では新たな渡航者用のターミナルビル（T2）とNo2ゲートの新設を予定しており、新たなターミナル（T2）

は既存のターミナル（T1）と接続し、電気や水などの供給、およびゴミ処理などを共有化することになる。B期間では、新たにNo3ゲート、Apron-E、駅との乗り入れ、立体駐車場の建設などが含まれる。目標としては、2020年までにコロンボとハンバントタ空港で2000万人を超える許容水準を見込んでいる。加えて、最新技術を導入し世界のトップレベルの快適性、利便性を備える国際空港をめざす。この空港の拡充/整備には日本との厚い友情による多大なる支援によって実現し、日本の“おもてなし”のアイデアも取り入れたユニークな空港となることだろう。



Explore Sri Lanka 誌（2014年10月号）の記事を翻訳したもの